

石心会グループ

社会医療法人財団 石心会
社会福祉法人 石心福祉会
医療法人社団 東京石心会

海燕

うみつばめ No.62 2014年9月

発行人：石井暎禧

編集人：辻田征男 発行：石心会本部

〒212-0013 川崎市幸区堀川町580

ソリッドスクエア東館4階

TEL 044-511-2266 (代) FAX 044-540-1135

http://www.sekishinkai.or.jp

提言

いつから患者のことを“患者様”と呼ぶようになったのか。患者というnegativeな言葉に“様”をつける迎合した呼び方も気に入らないが、ある有名な大病院では患者様を通り越して“病客様”と呼んでいる。まったく意味不明である。

病院業界でもCS(customer satisfaction)や接遇が言われたして久しい。当院でもCS委員会が立ち上がり、職員を対象とした接遇教育が花盛りである。しかし、私にはどうしてもこのような風潮がしっくりこない。これだけは断言しておくが、医療とはサービス業ではない。ホテルやデパートと病院は本質的に異なる。ホテルの客が求める満足(CS)は多様であり、その満足には普遍的なものではなく、収斂する傾向を持たない。しかし、急性期医療の目的は「治癒」の一点に収束する。「発症してから10年間、ずっと診てくれている主治医の先生のことは本当に信頼しています。でも、どうも私の手術には自信がないようなので……」。そう言って主治医には内緒で川崎幸病院に手術を依頼してくる大動脈瘤の患者は後を絶たない。患者のことを心から想い、患者からは信頼され、身だしなみもよく、“接遇”は完璧である自分の主治医に、なぜ、この患者は手術を依頼しないのか?なぜ、満足しないのか?ことは単純明快である。拙著『心臓外科医の覚悟』(角川SSC新書)にも書いたが、患者が最後に求めるのは医者の方の丁寧な態度でもやさしい言葉でもなく、「治る」ことである。

私はよく、医療者と患者の関係を山岳ガイドと登山者に例える。登山者があの山に登りたいと山岳ガイドに依頼する。つまり登山者は依頼人(client)である。ガイドのmissionは登山者を(可能であれば)山頂に立たせて、

今、あえて問う医療者と患者の関係
患者はお客様なのか?

山本 晋・川崎幸病院医師

(しかし、これが最も重要であるが)無事に下山させること、それ以外にはない。登山者の満足度は山頂に立つことで満たされるが、もし天候の悪化が予測されたならば登山者がいくら先に進みたいと言い張っても、ガイドはその意に反して登山者を下山させるのが使命だ。ここにこそ、顧客満足度を最優先にするサービス業との決定的な違いがある。

家族をも顧みず何日も病院に泊まり込む医師、休憩も取らず勤務時間をはるかに超えてもナースコールに応える看護師、患者の起床時刻に合わせて朝暗いうちから出勤してくる理学療法士、これ以上に何を彼らに求めるのか?海で溺れている遭難者を自分の船に引き上げるときは“接遇”など考えているヒマはない。死に物狂いで遭難者の腕をつかみ、全身の力でもって引き上げる。少なくとも私は医療をそう考えている。これは接遇とは次元の異なる問題である。患者は何を求めて病院を訪れるのか、そして医療者と患者の関係はどうあるべきかという本質的な問題なのである。それをなおざりにして

「患者が望んでいるから」あるいは「病院にもこれからはCSが重要だから」というような、日和見的で安易な理由から“接遇”に走れば、必ず行き過ぎが生まれる。医療者には、おざなりな美辞麗句を並べるのではなく、このことについて常に、そして真剣に悩み続けて欲しい。医療者は、初めて患者の前に出た時から引退するまでずっと、この根源的な問題と対峙しつづける宿命を持つ。



埼玉石心会病院の移転新築事業

埼玉石心会病院の移転新築に向けての動きは、以前からありましたが、いよいよ「移転新築事業」としての本格的な取組みに入っています。

5月14日付けの埼玉新聞で公表されましたが、石井暎禎理事長から示された「設計コンセプト」を要約すると、以下の通りです。

石心会の理念である、「患者さん主体の医療」「地域に密着した医療」「医学的根拠に基づく高度な医療」を実現する合理的で、利用者の満足度が高い高機能病院をつくる。

埼玉西部地域医療圏はもとより、隣接する地域も含めた急性期の中核病院を目指す。そのために救急医療とそれを支える高度医療を提供できる超急性期病院となる。

救急医療は、救急車搬送の患者だけでなく、ウォークイン、他の医療機関からの緊急紹介など、救急全般の患者さんを断らないもの。

高度医療では、①緊急性の高い心臓、脳の疾患は救命措置を施すだけでなく、世界に発信できるトプレベルの治療の質をもつ。②救急での吐下血を直ちに処置する。③がんについては、手術・放射線治療・化学治療を駆使して、積極的な集学的医療と緩和医

療ができる。

超急性期医療は、高度な技術を要する治療、重症患者の即時の十分な治療、救急患者の即時の治療、その後地域の他病院との連携と、そこでの主導性を発揮できる医療。

移転新築する新病院は、「24時間365日どんな時でも、止まらない・断らない・最善の医療を提供する信頼の砦となるハブ病院」になる。

新病院は、狭山市鵜ノ木の現病院から北東に約1.8kmの同市入間川地区に移転します。敷地面積は1万9300平方メートル。病床数は349から450に増えます。

特徴としては、大規模災害対策やへき地の救急患者の受け入れのため、屋上にヘリポートを設置、免震構造で自家発電装置を備え、災害時でも病院機能を維持することです。



埼玉石心会病院のERがスタート

埼玉石心会病院では、9月から北米型ERを基本とする断らない救急医療体制を立ち上げました。先行して川崎幸病院がERを実施していますので、埼玉石心会病院がERをスタートすることによって、断らない石心会の救急医療が実現します。

救急医療は急性期病院にとって大きな位置を占めるだけに、これからの活動が期待されます。

13年1月より「断らない救急」を目指しての体制作りが始まりました。14年4月1日に石井暎禎理事長が埼玉石心会病院院長に着任後、「埼玉石心会病院のERルールを作成し、運用をすること」を目的として、毎週金曜日にER問題検討会議を開かれ、関連する各種の問題を検討してきました。

2014年11月、新たに救急医が入職することが内定し、これを前提にして9月からER体制を確立させることになりました。

これまでの埼玉石心会病院の救急は、内科2人・外科1人・循環器科1人による医師の兼任での救急当番制で行われ、それに看護部、EMT科、医療秘書課が加わり構成されていました。

今後は、救急専任のER医師3人のほか、内科系、外科系、

循環器科、心臓血管外科の病棟当直医4人を配置して救急にあたることになりました。また、看護は33名の配置で変則2交代。EMTは15人を配置、救急救命士13人+CE2人です。

ERをスタートするにあたってはERルールが必要で、まず川崎幸病院のものに準拠することにしました。さらに埼玉石心会病院の独自性があるので、それを加えてルールづくりを進めることになりました。

ER問題検討会議メンバーは、石井院長、長谷川真作・脳神経外科副部長、須田恵美子救急ホールディング科長、守田孝志コメディカル副部長、板橋幸一EMT科長代行、平沼昌弘患者サービス課長、田中利明地域医療連携室長、柴崎陽子医療相談室長、持田和夫統括事務部長で構成されています。

(持田和夫・統括事務部長kazuo-mochida@saitama-sekishinkai.org)

「第二川崎幸クリニック(仮称)」を開設

現・川崎幸クリニックは開設して15年が経過しています。最近では1日に1200人を超える患者さんが来院し、施設の狭隘化が進むなどさまざまな課題が発生しています。

その解決策として旧・川崎幸病院（川崎市幸区都町39-1）を改修し、新たに「第二川崎幸クリニック」として開設する運びとなりました。

今後は各々のクリニックが、より専門性を重視した「内科系主体の川崎幸クリニック」と「外科系主体の第二川崎幸クリニック」として運営されていくことになります。すでに幸区医師会の了解も得られています。

第二川崎幸クリニックの主な内容は、

- ①専門診療(外科主体)の移動
- ②感染症患者への対応

- ③通院化学療法の開始
- ④時間外救急患者への対応
- ⑤日帰り手術センターの設置

の5項目を中心とした業務を行う予定です。

予定標榜科としては、外科、脳神経外科、心臓血管外科、形成外科、血管外科、呼吸器外科、消化器内科、皮膚科、小児科、泌尿器科、リウマチ科、放射線科等々で、現・川崎幸クリニックのスタッフが異動します。

第二川崎幸クリニックでは、災害時の外部電源喪失時でも機能する各種医療設備としてCT、MRI、単純撮影、各血液検査、各生理検査を稼働させ、約1週間程維持することが可能なものにさせます。

開設は、平成27年6月1日の予定です。

(織茂和洋・川崎幸クリニック事務長 orimo@saiwaihp.org)

川崎幸病院 ER ルールを改定

7月16日、笹栗志朗院長はERルールの一部を改訂しました。改訂部分のみを掲載します。

旧・ERルール

◆ERルール

◎川崎幸病院救急担当副院長は救急コーディネーター業務の補佐を行う。

◆救急搬送受入について

- ①小児救急
- ②周産期救急

③精神疾患単独患者(精神症状のみであり、身体合併症状が全くない患者)

◆問題発生時間い合わせ先

◎診療に対する患者からのクレーム等→救急部長or救急担当副院長

新・ERルール

◆ERルール

◎川崎幸病院救急・総合診療部長は救急コーディネーター業務の補佐を行う。

◆救急搬送受入について

- ①周産期救急
- ②精神疾患単独患者(精神症状のみであり、身体合併症状が全くない患者)
- ③小児救急 ただし、幼児以上の四肢単純外傷などの受け入れは検討する。※月～土の日勤診療時間帯内(救急医、整形外科医の在院時間帯)は、小児四肢単純外傷の受け入れに努める。

◆問題発生時間い合わせ先

◎診療に対する患者からのクレーム等→救急・総合診療部長へ





川崎、埼玉両地区の健康塾参加者の延べ人数3万人を突破

神奈川県のかわさき健康塾は、2012年10月に始まりました。そして1年9か月後の14年6月に参加者が3万人を超えました。この間の講演数は732でした。

埼玉地区の石心会健康塾は、12年11月に開始しました。そして14年5月に参加者が3万人を超えました。この間の講座数は700。

両健康塾には、それぞれ独特の個性があります。

かわさき健康塾について、紀平浩幸・戦略広報室長は「かわさき健康塾は一般講座、主催団体の要望で、企業や団体の関係者のみが参加する出張講座、季節やテーマに応じた中規模の特別講座、講演やパネルディスカッションで構成する大きな規模でフォーラムとして開催する市民公開講座などがあります。その他、川崎幸クリニック、川崎クリニックなどの記念講演や昼間に参加できない人のために夜に開催する夜塾も始めています」と話しています。

石心会健康塾について、小川宏行・地域医療推進室長

は、「小規模会場で毎日開催する石心会健康塾、埼玉県でがん対策推進条例が制定され、それを受けて子どもに向けたがん予防を啓発するための講座が始まりました。さらにそれがこども版医学公開講座に発展しました。



小川地域医療推進室長



また、地元ケーブルテレビが講座を録画して、放映しています。すでに170本の収録が終り放映していますが、想像以上の視聴率をあげています」と、埼玉県西部地区を担う医療の役割を果たしていることをあげました。

2014年度 石心会グループ入社式

4月1日、川崎市にあるソリッドスクエアの地下ホールで、神奈川県、埼玉地区合同で入社式が執り行われました。

新職員は149人。その内訳は、初期研修医8人、看護師67人、薬剤師はじめメディカル52人、事務22人です。

式は、新職員への辞令の授



与、新職員による入社式の辞令授与と石井映禰理事長からの挨拶がありました。

式が終わってミニコンサートが行われた後、オリエンテーションと研修を受け、埼玉組は川崎に1泊して、翌日も研修が続けられました。

川崎幸病院・川崎幸クリニック

2014年度 川崎幸病院 合同研究・活動発表会



川崎幸病院と川崎幸クリニック合同の研究・活動発表会が、2014年6月7日、川崎幸病院の講義室で開催されました。同発表会は医師を除くすべての部署から4部構成で21の発表が行われました。

講師として、看護部外部講師で東京工科大学医療保健学部看護学科高齢看護学の小林小百合先生と川崎幸病院の小林和彦・統括事務部長、佐藤久美子・看護部長、佐藤政延・メディカル部長が担当しました。

どの発表も力が入ったものでしたが、4つの項目で評価が決められました。

【総合】(総合は1位のみ)

第1位

「総合案内からみる当院利用者の反応に関する一考察」

総合案内 発表者：飯田真奈美

【発表の仕方】

第1位

「コスト管理による材料費削減と利益管理体制(原価計算)への課題」

資材課 発表者：安齊克也

第2位

「院内がん登録データからみる当院のがん診療の特徴について」

診療情報管理室 発表者：加藤むつみ



【着眼点】

第1位

「入院という環境の変化で不眠を訴える患者への援助 ～概日リズム障害の改善を試みる～」

10階北病棟 発表者：小熊綾

第2位

「化学療法・放射線治療中および終末期における緩和ケア食の取り組み」

栄養科 発表者：田内直恵

【発展性】

第1位

「リハビリテーション介入の在院日数短縮効果」

リハビリテーション科 発表者：板倉かりん

第2位

「院内で働く救命士が多職種協働における医療安全への取り組み」

EMT科 発表者：千村舞

川崎幸クリニック

QC活動報告会開催



2014年2月15日(土)、川崎幸クリニックでQC(Quality Control)活動報告会を開催しました。QC活動とは、業務改善・患者サービスの向上・

経費節減などのための活動のことで、川崎幸クリニックでは毎年1回実施しています。

各科が現状業務の問題点、患者サービスの不足点、知識としての情報提供などのテーマを取り上げ、問題解決のために行ったことや研究内容、調査結果、今後の展望などを発表しました。

訪問看護室は、「医療処置のある訪問診療患者の受け入れマニュアル作成」をテーマに発表。医療処置の多いがん患者さんの訪問診療導入の受

け入れ準備は時間を要するため、どのスタッフでも同じ対応ができるようにマニュアルの作成と、効率の良い受け入れ体制、受け入れ時の時間短縮を図ることを目標にしました。マニュアル作成により、確認・実施事項が明確となり全員に周知徹底ができたとまとめています。今後の課題として、各スタッフがマニュアルを活用し、実際に受け入れ対応して評価することをあげました。

(齊藤耕太・事務長補佐kotasaito@sekishinkai.or.jp)

川崎幸病院

キッズ外科手術体験セミナー

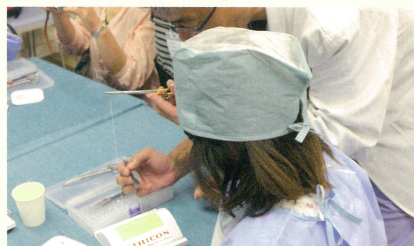


「君も未来の外科医になろう」と8月9日（土）の午後1時30分から4時まで、小学5、6年生を対象にセミナーが開催されました。20人の定員に対して40人もの応募があり、その希望に応えるため定員を30人まで拡大しての開催でした。指導に当たったのは関川浩司副院長（消化器病センター長／外科部長）以下外科のスタッフのほか初期研修医にも参加を呼びかけました。

参加した小学生たちは、スーチャリング、内視鏡手術シミュレーター、腹腔鏡トレーニングBOX、超音波メス体験、自動縫合器体験の5つのブースをチームに分かれて体験しました。初めて外科医師の仕事の

実際を経験したわけですが、外科医への道に進む動機になればと期待しています。

（紀平浩幸・戦略広報室長 h-kihira@saiwaihp.org）



さいわい鹿島田クリニック・川崎クリニック

幸ICLSコース ～蘇生トレーニングコース～

幸ICLSコースは、山崎継敬・心臓病センター副センター長／循環器内科副部長らが始めた、川崎幸病院で毎月1回開催される医療従事者向けの蘇生トレーニングコースです。修了者は日本救急医学会認定ICLSプロ

バイダーの資格が取得できます。

7月で第23回となり、受講者は100人を超えました。今回、初めて透析クリニックから、看護師と臨床工学技士が参加しました。参加したのは野口美晴・川崎クリニック看護科主任、本田清江・さいわい鹿島田クリニック看護科主任、武田勝・さいわい鹿島田クリニック透析技術課

主任。「同じ看護師でも事業所によって仕事内容は異なるため、普段とは全く違う緊張感の中で参加しました。医療従事者として一度は受けるべきだと考えます」と、参加した3人は話しています。受講料は8,000円と格安で、多くのスタッフの皆さんの参加がのぞまれます。

（岡本正太・事務長okamoto@kashimadacl.org）

川崎クリニック

新規に3外来を開設

川崎クリニックでは、5月の「足外来」に続いて、「整形外科」、「血管外科」をスタートさせました。また、整形外科に合わせてリハビリテーション室も開設しました。

専門外来の足外来は、毎月第1・3月曜日、整形外科は、月曜から金曜日まで毎日、午前・午後、血管外科は毎週水曜日の午後と第1・4土曜の午前に診療します。

（岡本正太・事務長okamoto@kashimadacl.org）

川崎健診クリニック

法人の変更

川崎健診クリニックは法人が医療法人社団東京石心会でしたが、2014年4月1日に社会医療法人財団石心会に変更されました。

（渡邊祐介・事務長u-watanabe@alpha-medical.gr.jp）

川崎幸病院・看護部

ヘアメイク講座 新卒者研修のオリエンテーションで

看護部の今年度の新入職者は79

人。4月1日から30日にかけてオ



リエンテーションが実施されました。

4月26日の研修はヘアメイク講座でした。毎日患者さんと向き合う看護師にとって、看護知識や技術の習得は言うまでもなく、身だしなみにいたるまで十分に気を配りたいものです。

この講座では、外部から講師を招いて、看護師にふさわしいメイクやマナーとしてのメイクの研修を実施しました。それぞれが机に置かれた鏡に向かって、真剣にメイクに取り組みました。また、男性看護師にはメイクではなく、眉毛のお手入れを体験してもらいました。

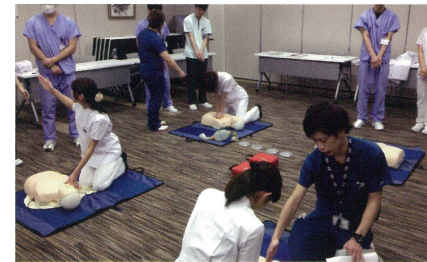
（佐藤久美子・看護部長k-sato@saiwaihp.org）

川崎幸病院・コメディカル部

新人オリエンテーション

4月7、8両日の午前中、講義室

で「院内感染」「医療安全」「BLS」「電子カルテ」についてコメディカル部合同の平成26年度の新人オリエンテーションを開催しました。



これまでの、看護部の新人オリエンテーションに相乗りさせてもらっていましたが、今年度はコメディカル部独自で行いました。

参加者は、リハビリテーション科、医療相談科、検査科、CE科の新人12人。真剣に学ぶ姿が印象的でした。

（佐藤政延・コメディカル部長 m-satou@saiwaihp.org）

神奈川地区 石心会納涼祭が開催

すでに25年以上続けられている石心会主催による納涼祭が、今年も7月26日（土）の18：30から南河

規模を大きくし、これまで使われていた場所には飲食の屋台に限定、輪投げや風船釣りなどのゲームゾーン

を新たに設け、混雑を避けました。

昨年は終了近くになって雨が降りましたが、今年は雨もなく来場の皆さんは最後まで楽しめました。

（山田さやか・総務課主任 yamada@saiwaihp.org）



埼玉石心会病院

石心会埼玉地区事業所 チャレンジシート発表会

埼玉石心会病院のチャレンジ発表会が5月25日(日)管理棟2階会議室で開催されました。前年に発表した各部署のチャレンジの成果と課題を踏まえて、今年度の新たなチャレンジ目標を発表するというもの。

診療部、各部部長は1人5分+質疑2分の持ち時間7分、メディカルスタッフは1人3分で発表が行われました。

青山筆頭副院長、持田統括事務部長の挨拶の後、第1



青山筆頭副院長

部の診療部は、堤謙二・副院長／外科主任部長をはじめ7つの発表。

第II部看護部は水野たつ子・看護部長はじめ17部門。第III部コメディカル部は、長田正章・コメディカル部長／リハビリテーション室長はじめ10部門。第IV部



持田統括事務部長



堤外科主任部長



水野看護部長

療安全課は、田村昌子事務部副部長はじめ12部門。第V部さやま腎クリニック

が2部門、さやま総合クリニックが4部門。第VI部地域ケアセンターが4部門。合計56のチャレンジ目標を発表されました。昨年の実績を踏まえた目標だけに内容は実践的でした。

これらの発表を受けて、青山・筆頭副院長による講評が行われました。午前9時から休憩を挟んで午後5時まで熱意がこもった発表会でした。充実した成果が期待されます。

(田村昌子・事務部副部長masako-tamura@saitama-sekishinkai.org)



長田コメディカル部長

埼玉石心会病院

新看護体制としてPNSを導入

4月8日から新しい看護体制PNS(パートナーシップ・ナーシング・システム)を、4階南病棟(内科)で導入しました。



PNSは福井大学医学部附属病院で開発された看護体制で、その研修に科長・主任(計3人)が参加し、2014年1月から準備を始め、4月から導入することができました。

PNSは、2人一組の看護師が安全で質の高い看護を共に提供することを目的とします。良きパートナーとして対等な立場で互いの特性を活かし、相互に補完し合い、協力して毎日の看護ケアをはじめ委員会活動・病棟内の係の仕事を1

年間通じて活動し、その成果と責任を共有する看護体制のことです。

日勤で、看護師2人ペアとなり、10～12人の患者さんを受け持ちます。当初は、個人の力量によって、業務終了が違う・何を優先させればいいのかかわからない・業務多忙で時間に追われる・受け持ちが多く忘れた処置がないか不安・ナースコールが鳴っても出られない・患者数が多いため患者さんとの関わりが薄い気がするなど、スタッフの戸惑いは多かったです。

開始1週間後、3か月後に業務改善カンファレンスを行い、細部に渡り業務を見直し・統一を図りました。現在は、まだ発展途上であり、医師からも積極的な協力もあって少しずつ形となってきています。

(加古幸子・看護部yukiko-kako@saitama-sekishinkai.org)

埼玉石心会病院

「こども版医学公開講座」を開始

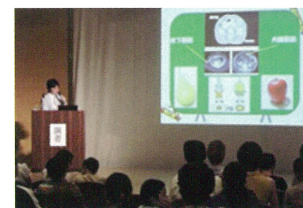
小さな頃から正しい医学知識を学び、「早期発見・早期治療」の予防医学の大切さを理解するため、こども

版医学講座を定期的に開催することになりました。

2014年6月14日(土)、狭山市市民交流センター「コミュニティホール」で、小学生、中学生、保護者を対象として「がん」「生活習慣病」「感染症」をテーマにした授業を行いました。参加者は約150名。



1時間目は埼玉石心会病院の堤謙二副院長による「がん」について。学校の授業では、がんについて学ぶ機会はあまりありません。がんの基本的な事柄から、がん予防や身近な人ががんを患った時などに役立つことを話しました。



2時間目は「生活習慣病」につい

て。さやま総合クリニック小野田教高院長が話しました。



3時間目は「感染症」について。講師は埼玉石心会病院徳屋しのぶ感染管理認定看護師。

講座は、学校の授業時間の45分に合わせて3コマの授業形式で行われました。スライド内容は、事前に表現などを狭山市内の養護教諭の先生方に確認していただきました。また、休憩時間には、外科手術体験コーナー(超音波メス体験、内視鏡シミュレーター体験、腹腔鏡下胆嚢摘出術シミュレーター体験)を設置し、子どもたちに外科医の体験してもらいました。

(小川宏行・地域医療推進室長hiroyuki-ogawa@saitama-sekishinkai.org)

埼玉石心会病院

日本病院学会で6人が発表

第64回日本病院学会(学会長:中川義信・独立行政法人国立病院機構 四国こどもとおとなの医療センター院長)が2014年7月3・4日、香川県高松市で開かれました。

テーマは「今、医療人・病院に求められているものー明日への飛翔ー」。埼玉石心会病院から6名の職員が、研究や経験を発表しました。

日本病院学会は、医師や看護師だけでなく、コメディカル、事務職員など医療に携わるすべての職種が一同に集まり、それぞれの問題や経験を共有する大規模な学会です。当院の職員は、一般口演とポスター発表に参加しました。

当院の発表者と演題は次のとおりです。

大原絹代・看護部科長 「ポジショ

ニング強化と褥瘡マットの適正化で得られた院内褥瘡の変化」

大石俊・資材課『『チーム医療』に参画する事務職員～手術室看護師をサポートする資材課員の一例～』

石塚明美・看護部管理室科長「病院内の禁煙活動と喫煙率の経過～職員に対する禁煙啓発活動と禁煙支援を通して～」

小川宏行・地域医療推進室「埼玉石心会病院が『地域』へ提供する3つの健康講座」

鈴木教大・コメディカル部放射線技師「当院の救急依頼における頭部MRI検査の取り組みについて」

小林保彦・コメディカル部臨床検査技師「当院での総胆管結石症に対する最新の治療」

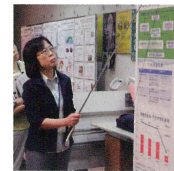
(持田和夫・統括事務部長kazuo-mochida@saitama-sekishinkai.org)

さやま総合クリニック

今年も日本人間ドック学会に8人が参加

第55回日本人間ドック学会学術大会が9月4・5日に福岡県福岡市で開催されます。健診センターから8人が口頭発表を行い、2セッションの座長を担う予定です。

発表者は、萩原美桜(診療部)、藤田映輝(診療部)、渡邊絵美(検



大原看護部科長



大石資材課職員



石塚看護部管理室科長



小川地域医療推進室長



鈴木コメディカル部放射線技師



小林コメディカル部臨床検査技師

診課)、石橋由佳理(保健師)、椎葉公仁(放射線)、古賀文子(検体検査)、吉田貴典(生理検査)、大野勇人(生理検査)の皆さんです。8月27日には院内で予演会を行い、本番に臨むことになっています。

ちなみに昨年度の学術大会では8演題を発表し、4件が優れた演題として「座長推薦」を受けました。

(弦巻美絵子・健診センター事務部健診課mieko-tsukurumaki@saitama-sekishinkai.org)

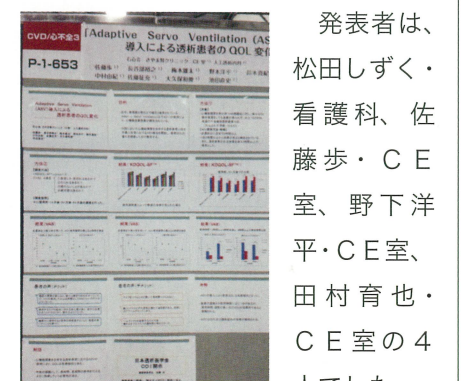


昨年、浜松市で開催された学術大会にて

さやま腎クリニック

日本透析医学会学術集会・総会に7人が参加

6月12日から15日まで、神戸市で第59回日本透析医学会学術集会・総会が開催されました。さやま腎クリニックから看護科3人、CE室4人の計7人が参加しました。



CE室、人工透析内科のポスター発表

(工藤秀行・事務課hideyuki-kudou@saitama-sekishinkai.org)

発表者は、松田しずく・看護科、佐藤歩・CE室、野下洋平・CE室、田村育也・CE室の4人でした。